

# 事件事故報道にみるアメリカ世の豊見城

嘉数 聡

はじめに

2022（令和 4）年は、沖縄県が本土復帰した 1972（昭和 47）年から 50 年目となる節目の年に当たり、米軍統治下（アメリカ世）の世情や復帰を題材にした種々のイベントが企画されている。

このアメリカ世において当時の豊見城村は、村広報紙「広報とみぐすく」の発行を始めた（1962（昭和 37）年 8 月～）。現在では、復帰までの約 10 年間の行政の動き、地域の人びとの暮らしを伝える資料の面もあるが、広報紙という性質上、事件や事故の記録はあまりみることができない。

事件や事故は少なからずその時々社会形態や状況を反映するものである。「アメリカ世の沖縄は米国からさまざまな恩恵を受ける反面、米軍や外国人の犯罪に悩まされることも多かった」といわれることも、そういった社会の様相を映し出している。筆者はこういった事件、事故をひも解くことで豊見城村の戦後史にアプローチできるのではないかと考えた。当時、リアルタイムで報道されてきた紙面を調査し、豊見城村のアメリカ世の姿を描き出していきたいと思ったのである。

そこで終戦後から復帰にいたる 1945（昭和 20）年 8 月～1972（昭和 47）年 5 月 15 日までの約 27 年間に発行された新聞「うるま新報」、「琉球新報（うるま新報から改題）」の社会面に目を通して、豊見城村内で発生した、または豊見城村民が関係した事件事故などの記事を採録して事件録を作成した。該当する記事は管見の限りではあるが 900 点ほど確認でき、そこから続報記事や報道された裁判結果記事などを差し引いて 798 点に絞りこんだ事件録となった。

あくまでも新聞報道であるためこれらは実際に起きた事件事故のごく一部といえる。また、誤報の可能性や情報不足という側面もあり、記事の内容＝実際に起こったことの全てであるとは決していえない。それでも、アメリカ世における豊見城村の様子を一部でも描き出すことはできるだろう。

より正確に期するためには裁判記録等も見てみる必要があるが、今回はそこまで至れていないことを明記しておく。

事件録を基に豊見城村内で発生した、または村民が関係した「交通事故」、「窃盗事件」、「強盗事件」、「火災・爆発事故」についてと、事件録上では米軍や外国人が絡む事件として別にまとめた「米兵・外国人・米軍絡みの事件事故」について特徴的なものをいくつか取り上げ、新聞報道から見るアメリカ世における豊見城村の輪郭を描き出していきたいと思う。

該当する記事を掲載することはできないので、文化課が所有する写真を使いつつ、報道から読み取れた事件事故以外のエピソードも交えて紹介していく。

## 1. 交通事故

豊見城村内で発生した、または豊見城村民が関係した交通事故は、236 件採録できた。全体の 29%強を占める。報道上の限りでいえば交通事故は、この当時の村・村民に関係して最も多く発生した事件といえるだろう。

「琉球新報」の報道では、1951（昭和 26）年～1972（昭和 47）年の間で確認でき、全体的に見て年を経るごとに増加傾向にある。事故発生件数が 1951 年～1959 年の約 10 年間で 47 件（うち村内 14 件、

村外 33 件) 確認できた。この 47 件には荷馬車による事故 3 件も含まれている。1960 年～1969 年になると発生件数が 154 件 (うち村内 62 件、村外 92 件) となっており、前 10 年の期間比で 3 倍以上の事故報道を確認することができる。豊見城村内での事故発生数に至っては 4.5 倍強となっており、これは沖縄全体で車所有率が高くなった社会状況と、村内の道路整備が進んだことに要因があると思われる。「広報とみぐすく」紙面でも発行当初から村内道路の修理、補修、整備を伝える記事が見られることから、1950 年代に比較して村内における車の往来が多くなり、相対的に交通事故が増加したと考えられる。



1969 (昭和 44) 年に豊見城村内で発生した交通事故の現場。

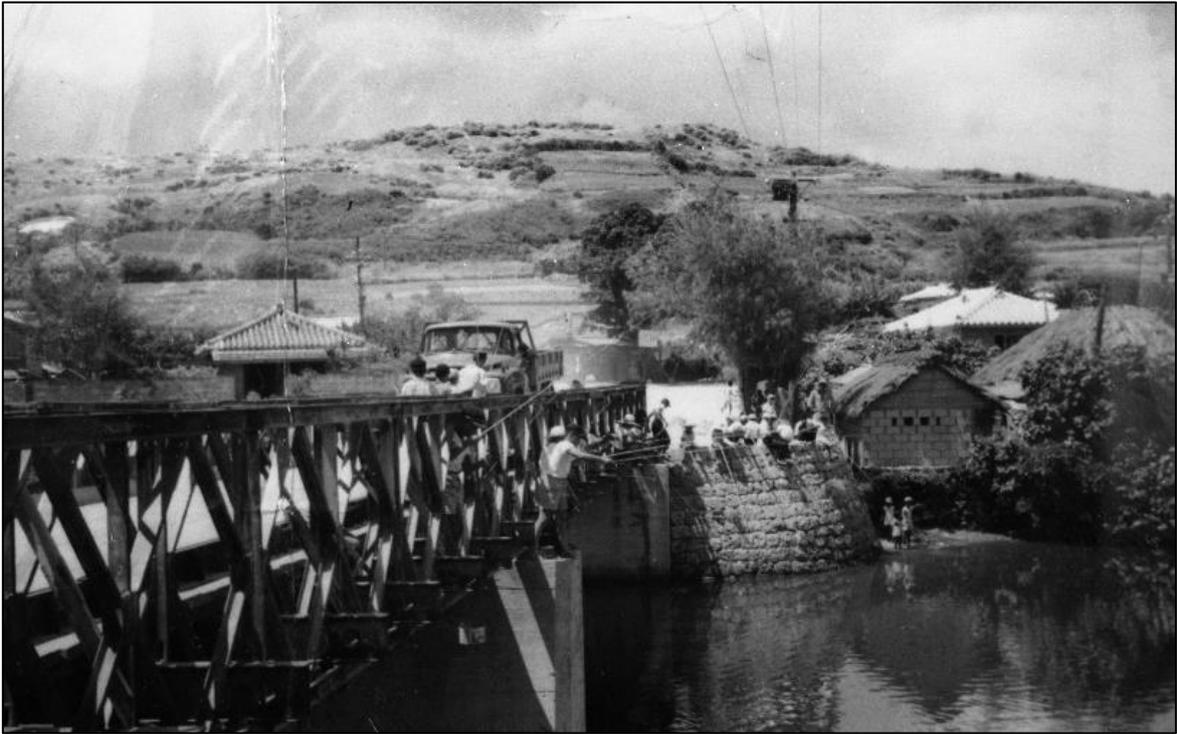
文化課に移管された広報写真 (「広報とみぐすく」作成の中で撮影された写真) の中に収まっていたが、広報作成の中で撮影されたものかどうかは不明。当時の「広報とみぐすく」や近い時期に発行された「村勢要覧」などにもこの写真は使用されていなかった。もし当時の広報作成担当職員が撮影したものなら、豊見城村当局としても村民への安全運転よびかけ、啓発の必要性を感じていたのだろうか。

1951 年～1972 年の間に発生した交通死亡事故は 236 件のうち 30 件 (荷馬車による事故も含む) となっている。村内発生数 20 件、村外発生数 10 件となっており、このうち豊見城村民に過失があったと読み取れる交通死亡事故は 14 件だった。

その中で特筆すべき事故は 1966 (昭和 41) 年に村内で発生したものである。村民が飲酒した状態で大型トラックを運転し、小型貨物車と乗用車を巻き込む事故となって犠牲者を出した。この事故を起こした人物を取り調べた結果「酒を飲んで運転すれば事故を起こすことを知りつつ運転した」として、沖縄において交通死亡事故を傷害致死罪 (未必の故意 (故意の一種)) で送検した初めてのケースとなった、と報道している。この事故に関する報道は管見の限りこれ以降確認できなかったのも、その後どのような動きを見せたのかは不明である。戦後沖縄の交通事故処理のあり方にも影響を及ぼした可能性があったことを考えると、別の資料などから調査していきたい。

車を持つ人が増えたことに比例して人身事故も増加という、当時の沖縄が抱えた社会問題の渦中に、豊見城村もあったということができよう。

交通の話に関して余談になるが、1960 年代末は新聞紙上で「交通戦争」と表現されることもあるほど車の数が増加し、深刻な社会問題となっていた。字高安の高安橋では、橋幅が狭いにも関わらず車の往来が激しかったため、高安から豊見城中学校に通う生徒たちは「車に橋を奪われた」状態だった。そのため橋に並行して架かる水道管の上を歩いて通学し、付近の村民をヒヤヒヤさせていたという。しかし、当の生徒たちは「車の往来も激しく...らん干にへばりつくようにして歩く」状態のため、「むしろ「水道管の上を歩いたほうが「安全」」という認識だったことが伝えられている (1969 年 11 月 7 日夕刊【車に橋を奪われ これはあぶない 水道管渡り通学 豊見城】)。同記事では歩道を架ける計画を進めている旨も報じており、こういった記述から発展途中の豊見城村の姿を知ることができる。



1948（昭和 23）年にできた鉄橋真玉橋は 1960 年代に入ると、経年劣化が進み付け根部分が折れて崩れかける事態にもなった（1960 年 12 月 7 日日刊【真玉橋がくずれる 鉄ケタが腐る・馬車通行止め】）。上の真玉橋で釣り遊びをする子どもたちは昭和 30 年代に撮影されたもので、欄干から身を乗り出し危ない状態で釣りをする子どもの姿が確認できる。1961（昭和 36）年 7 月に警察が周辺各学校へ「真玉橋で危険な釣りをしないように」と指導するよう求めたという報道もあり、写真はこの頃に撮影されたものだろうか。1522 年の架橋から 2022 年で 500 周年を迎える真玉橋。悠久ともいえる長い歴史を持つ真玉橋にとって、アメリカ世はさまざまな出来事起きた激動の時代だったといえるかもしれない。

## 2. 窃盗事件

窃盗事件は全部で 125 件確認できた。このうち、豊見城村民が村内外で何かしらの窃盗行為を行なったものは 59 件採録した。その反対に村民が窃盗被害にあったもの、あるいは豊見城村内で発生したものは 66 件採録した。

まず村民の加害面を見ていく。59 件のうち村内発生 11 件、村外発生 44 件、発生場所不明 4 件となった。加害の発生件数は事件録全体の 7%にあたる。

「琉球新報」の報道では、1948（昭和 23）年～1970（昭和 45）年の間で確認でき、盗むものに時代が反映されている。例えば 1940 年代末に報道された 2 件の窃盗事件は食糧に関連したものだ。輸送用の豆を窃盗するケース、米軍施設工場から雷管火薬を盗み漁業（爆破漁）に使おうとしたケースなどである。生きるために必死だった人びとの暮らしの様子が伝わってくる。

1950 年代にはいると、米軍基地内からの窃盗に及ぶ犯行も報道され始め、そのほかにはズボンや洋服、靴など身につけるものを盗む例も増える。スクラップ・ブーム（当時沖縄で起こった屑鉄くずてつ景気）もあり、それに関連すると思われる屑鉄泥棒や電線泥棒を行う者もいた。

1960 年代にはいると盗むものはさらに多様化し、車、オートバイ、レコードを再生する装置であるジュークボックスや公衆電話を壊して現金を盗む行為や、車輛を使って港湾や雑貨店を狙い多量に窃盗を行う例もあった。ある村民が窃盗団のリーダーとなって、2 カ月間で本島各地のジュークボックス計 50

台から現金を盗むという多額かつ広域窃盗事件を起こしたことも報道されている。

被害面に移る。村民が村内外で窃盗被害にあった、もしくは豊見城村内で発生した事例について 66 件確認でき、発生件数は事件録全体の 8%にあたる。このうち村内発生 50 件、村外発生 16 件となった。村内で発生した事例は建造物、学校、会社施設が窃盗被害を受けた事例もカウントした。

「琉球新報」の報道では、1951（昭和 26）年～1971（昭和 46）年の間で確認でき、村民が村外で被害にあったケースはすべて那覇市域（真和志村／真和志市を含む）だった。盗まれたものは現金や村外に駐車していた車輛などの事例が多い。村内で被害にあったケースでも家畜や農作物などの被害事例は意外と少なかった。

先述したスクラップ・ブームに関連して、1955（昭和 30）年には村内で電線の盗難被害が多発し、報道にあるだけでも 7 件確認できる。さらに、1955 年 11 月 12 日日刊の記事では、当時は鉄橋だった真玉橋の連結部品が窃盗被害にあったことが報道されている。屑鉄景気花盛りのこの頃、まだ鉄橋だったばかりに真玉橋は被害にあってしまったのである。

村内の学校や会社施設の被害に目を向けると、1954（昭和 29）年 10 月 16 日夕刊には豊見城中学校で使用されていたミシン 5 台（ハワイの県人会から贈られたもの）が盗まれたこと、1955 年 7 月 10 日日刊には座安小学校から高価なミシンが盗まれたことが報道された。転売目的のミシン泥棒だったと思われる。1963（昭和 38）年 3 月 29 日夕刊には字根差部のオリエンタル煙草株式会社からタバコが 50 ボール盗まれたこと、1967（昭和 42）年 1 月 30 日日刊には豊見城高校の職員室に置いてあった現金と校庭に駐車していた乗用車が奪われたことが、それぞれ記事になった。

1971（昭和 46）年 12 月 2 日に報道された字長堂で発生したひったくり事件は、オートバイ 2 人乗りで背後から近づき、窃盗役と逃走役の役割分担をしたうえで犯行におよぶという当時は前例のないもので、新しい型の機動犯罪として模倣犯の出現が警戒された。

### 3.強盗事件

豊見城村内で発生した、または豊見城村民が関係した強盗事件は 63 件確認でき、全体の 7%強を占める。このうち、村内発生が 36 件、村外発生が 27 件となっている。「琉球新報」の報道では 1950（昭和 25）年～1971（昭和 46）年の間で確認できた。

強盗事件はタクシー強盗事件（「那覇市のタクシー運転手が豊見城村内で強盗に現金を奪われた」など）も採録したため、村内発生＝村民の被害もしくは加害とは限らない。

強盗事件の中には豊見城女性の力強さ、たくましさを感じさせてくれるものもある。1951（昭和 26）年 12 月 4 日の新聞には、真和志村安里（現・那覇市安里）で強盗に脅され現金を奪われた字伊良波の女性 4 人が、仲間内で苦労のすえに工面したものを奪われた悔しさから「草の根を分けてでも犯人を見つけ出す」と奮起、那覇市でその強盗を発見し、事情を知った周囲の人びとの協力も得てこれを捕まえ、警察に突き出すという胸のすくような顛末を迎えた事件が報道された。

強盗事件 63 件中 25 件はタクシー強盗事件で、このうち豊見城村内で発生したものが 13 件だった。当時の人通りが少ない道路や農道、タクシーを奪いすぐに逃走できるよう工場や会社前の車道で犯行に及ぶケースが多数確認できた。豊見城村外で村民が被害にあった事件の中には、1965（昭和 40）年 5 月 21 日夕刊報道分、1967（昭和 42）年 11 月 11 日夕刊報道分が、それぞれ、宜野湾市とコザ市（現・沖縄市コザ）で少年強盗に襲われ負傷しながらも、相手を組み伏せて警察に突き出すという大手柄を挙げた内容の記事となっている。特にコザ市発生のもは強盗常習犯の少年を捕まえており、報道によれば

「コザ市内で起きた未解決の強盗事件のほとんどが一挙解決」という、村民が大活躍した内容だった。

強盗事件における豊見城村民の加害面を見ていくと、1970（昭和 45）年の東風平村宜次（現・八重瀬町宜次）における村民による強盗事件が特筆すべき例として挙げられる。この事件は「凶器を持って人質をとる」という手法で犯行におよんでおり、当時の沖縄では前例のない内容のものだったため警察関係者はこの事件を重視し模倣犯の出現を警戒した。村民が逮捕されてからも数度関連する記事が報道され、この人物の家庭環境や「人質を取る」という手法は同年 3 月に発生したよど号ハイジャック事件に着想を得たものではないか、といった記事が掲載された。

犯人確保に貢献した村民の活躍がある一方で、沖縄の戦後犯罪史に名を刻む事件を起こした村民もいるなど、豊見城村民が絡んだアメリカ世の強盗事件は多様なカラーを持っている。

#### 4. 火災・爆発事故

豊見城村内で発生した、または豊見城村民が関係した火災は 33 件確認できた。全体の 4% である。この数字は不発弾の爆発等が明確な原因である火災を含んでいない。

「琉球新報」の報道では 1952（昭和 27）年～1972（昭和 47）年の間で採録できた。

火災原因不明（詳細がないものも含む）の事件もあるが、失火が 17 件と最も多い。小火や家屋の焼失だけで済めばまだよいが、失火による火事で人が亡くなるケースも 3 件確認できた。

1950 年代には「カマドの残り火不始末」が原因の火事がある一方で、1960 年代にはヒューズの代わりに銅線を用いたため火事となるケースなど、当時の村内における身の回りにあったものや、電気の普及といった生活の様子が読み取れることもできた。

放火は 5 件で、すべて 1950 年代に起こった。1954（昭和 29）年は字長堂出身の又吉一郎人民党員が豊見城村長に当選したことや、米軍の防共行動のひとつといえる人民党事件（米軍に共産党のひとつとみなされた政党人民党員多数が様々な罪状で逮捕された事件。逮捕者には字我那覇出身の瀬長亀次郎、先述の又吉一郎も含まれた）が起こるなど、村内は政治的問題に大きく揺れた。この年の村長選挙運動に関連していると目された放火事件が発生している点も、当時の豊見城村の空気を伝えてくれる。

1970（昭和 45）年頃は、沖縄にも石油コンビナートやガススタンドが開発、増設されていた時期にあたる。発展の反面、それらの火災の対処について不安視されていた。当時の沖縄の消防が所有していた化学消防車は旧式の小型車のみで、大規模な石油火災などの消火は不可能と考えられていたからである。そのような中、字真玉橋の資材集積所でタバコの不始末が原因と思われる火事が発生、延焼先に積み置かれた殺虫剤原液に引火して爆発を起こし大火災に発展する事態となった。真玉橋の住民 8 世帯 38 人も避難する騒ぎとなり、火災は 6 時間以上続いた。この火災後に掲載された記事では「こんどの真玉橋の大火で関係者たちも化学消防体制の確立を痛感したことだろう。本土復帰を控えて消防力の早期強化が望まれるところである」と当時の沖縄が持つ消防体制の限界とその強化の必要を強く訴えている（1970 年 9 月 21 日日刊【急げ化学消防車の装備】）。

また、火災とは別統計の爆発事故についても見ていく。ここでいう爆発事故は、不発弾のいたずら、火薬抜き取りによって発生した事故は含まず、ガス爆発事故について採録したものである。新聞報道で見ると豊見城村に關係する発生件数は少なく、798 件中 2 件と全体の 0.2% となった。

この 2 件はいずれも 1970（昭和 45）年に発生しており、完成して間もない豊見城団地においてプロパンガス誤用による爆発を起こし女性が大火傷を負った事故と、村民が那覇市内の飲食店前に置かれていたプロパンガスの爆発に巻き込まれ負傷した事故が確認できた。



1960年代末～1970年代初頭の原野火災の消火風景。アメリカ世の豊見城村は水不足に悩まされることが多かった。ひどい干ばつ時には水による消火活動ができないほどで、そのような時は燃焼地点から少し離れた所の草木やキビを切り倒して延焼を防ぎ自然鎮火を待つ、という消火方法などが取られた。

那覇市での爆発事故は、プロパンガスの設置業者側と飲食店側のどちらに過失があるのかはっきりせず5カ月余りも補償が受けられていない、というもので当時の沖縄における新しい社会問題として、その存在を投げかけている。アメリカ世の豊見城村内、村民に関係する爆発事故は件数こそ少ないものの、当時の世相を反映している見落とせない出来事と言えるだろう。

#### 5.米兵・外国人に関連する事件・事故

豊見城村内で発生した、または豊見城村民が関係した米兵・外国人(軍関連も含む)の事件事故は1946(昭和21)年～1971(昭和46)年にかけて50件確認でき、全体の6%を占める。

事件事故の内訳としては、器物損壊1件(村内1件)、交通事故20件(村内10件、村外10件)、強盗8件(村内5件、村外3件)、無賃乗車詐欺1件(村外1件)、傷害1件(村外1件)、盗難3件(村内1件、村外2件)、婦女暴行未遂1件(村内1件)、失火1件(村外1件)、軍関連14件(基地造成にかかる被害、人民党事件、村内への米軍ヘリ不時着など)となっている。このうち傷害、無賃乗車詐欺、失火、強盗3件、交通事故1件の7件は、当時タクシー運転手を勤めていた村民が被害を受けたものである。報道記事のみの情報では一概にいけないが、米兵・外国人の事件事故に最も多く関わった村民の職業種は、タクシー運転手だったかもしれない。

軍関係を除いた36件中、豊見城村民に過失・加害性があるものも数件あるが、多くは村民、もしくは沖縄住民の被害だった。報道された限りで見ると村民が米兵の犯罪に巻き込まれた最も古い事件は、1952(昭和27)年に真和志村安里(現・那覇市安里)でタクシー運転手の村民が傷害の被害を受けた事件である。また、村内で起きた米兵絡みの事件として1953(昭和28)年の暴行未遂事件や、1959(昭和34)年の村民が所有する削り船を壊された器物損壊事件などが挙げられる。

軍関係14件は、瀬長島基地造成による村西部への影響に関する記事に注目したい。米軍の無通告爆破作業で飛び散る石片によって字与根の塩田が危険にさらされ、島の地下資源の減失といった被害などが1953(昭和28)年10月31日の記事に報道されている。その後、1963(昭和38)年12月16日夕刊には、字瀬長で家屋や畑に石や土の塊が落下し広い範囲に被害を受けたことが報道された。落下物の



1950年代に撮影された瀬長島。裏面には「OFFICIAL USAF PHOTOGRAGH...」と印鑑があり、アメリカ空軍が撮影した基地造成が本格的に始まる前の姿と思われる。基地造成後の1970年代には、基地からの廃液が原因と考えられた島周辺の魚大量死なども発生しており、様々な社会問題も報じられた。

中には「カワラぶき一軒に約三十三ヶぐらいの穴をあけられ」る程の大きさのものあり、トマト、ネギ、大根の畑にも被害が及んだと伝えられている。これも爆破作業のためと考えられた。

現在は観光地として市内外に有名な瀬長島であるが60年ほど前は、島をとりまく環境は大きく違っていたといえるだろう。

豊見城村内で起こった米軍・米兵絡みの事件事故の中で、沖縄中から注目された<sup>れきさつ</sup>轢殺事件があった。1971（昭和46）年、酒気帯びの状態で乗用車を運転していた米兵が豊見城村の児童をはねて死亡させた事件である。

豊見城村当局はこの事件を重く受け止め対策委員会を発足した。対策委員会は、事件がうやむやにならないようにしてほしいと警察や琉球政府（当時の沖縄住民政府機関）に訴えるとともに、「今回の事故は単に児童遺族の問題ではなく、いつ自分の身に降りかかるかわからないもので広く全村民の問題とすべき」という考えのもと村民大会を開催するなど、遺族への賠償や公平で適切な裁判を求め積極的な動きを見せ、それは豊見城村を越え周囲の諸団体にも波及していった。

翌年の1972（昭和47）年から嘉手納基地内で軍事裁判が始まった。この様子は記事の中で「裁かれる者、裁く者すべてがアメリカ人。そして傍聴席を埋めるのは沖縄住民ばかり」と表現されている。軍事裁判はこれまで米兵が絡む事件で不条理ともいえる無罪判決を多数くだしていただけに、裁判の行方が注目された。この裁判ではある米宣教師が傍聴席へ向けて、英語のみで進む裁判経過の通訳を行うなど沖縄側に寄り添ってくれる米国人の存在もあった。

被疑者である米兵が犯行を否認したまま始まった裁判に、事故現場を目撃した村民も証言台に立った。その中には被害児童の級友もいて、弁護側の2時間以上続く質問の数々にも答えるなど必死の証言をし

た。検事側と弁護側の応酬がなされるなか、警察が全力を挙げて収集し提出した物的証拠が大きな決め手となり、被疑者の米兵には有罪判決がくだされた。

轢殺事件発生後、豊見城村当局は「児童の死をうやむやにさせない」といち早く行動を起こし大衆運動化させ、そこで巻き起こる沖縄住民の声は少なからずアメリカ側へ見えない圧力となった。また、捜査権を持たない警察側の目撃情報、物的証拠集めも裁判結果に大きく影響し、「軍民間の事件でここまで証拠品がそろふことは珍しい」と米軍検察が語るほどの成果をあげたという。

沖縄の本土復帰直前に起こったこの事件に関しては、不条理な裁判、統治のあり方と戦うその急先鋒に、多くの豊見城村民の姿があった。そしてこの事件は沖縄住民が一丸となって“軍優先・住民無視”の軍事裁判から米兵有罪判決を勝ちとった事件だったといえるかもしれない。

ただ、有罪判決をくだされたこの米兵が、その後「正しく罰されたのか」を正確に知ることは難しい。確かなことは、アメリカ世において沖縄住民が被害を受けた米軍・米兵関連事件の中で、<sup>りゅういん</sup>溜飲が下がる事件はほとんど存在しないということである。

終わりに

以上、報道された事件事故について、その一例を見てきた。

重ねていうがこれらはあくまで「琉球新報」紙上で報道されたもので、豊見城村内で発生、村民が関係した事件事故の全てであるということではできない。全体のうち表層に現れたごく一部といってもいいだろう。それらからアメリカ世における豊見城村の容姿をいくらかでも描き出すことができているれば、また、読者がこの時代への理解を深める一助となればとてもうれしく思う。

終戦に前後して発刊され、当時の沖縄社会や様子をより長い期間報道している点を踏まえて「琉球新報（うるま新報）」を採録対象としたが、もう一つの県紙「沖縄タイムス」の情報も収集し、より正確かつ詳細な情報をまとめて、事件録と共に企画展等で紹介したいと考えている。

今回の事件録作成および執筆に当たり、豊見城市立中央図書館、沖縄県公文書館、沖縄県立図書館には大変お世話になりました。この場を借りて、お礼申し上げます。

参考文献 「うるま新報」、「琉球新報」の紙面については以下の資料より引用した。下記期間以外は全て、豊見城市立中央図書館所蔵琉球新報社『琉球新報 縮刷版』より引用した。

不二出版 『うるま新報』（第1巻～第6巻）

不二出版 『琉球新報 「うるま新報」改題』（第7巻～第9巻、第16巻～第17巻）

沖縄県公文書館マイクロフィルム複製 （1953年3月～12月、1954年5月～1964年4月、1969年8月、10月、12月、1970年2月、4月、6月、7～9月、11月、1971年2月、4月）

沖縄県立図書館所蔵複製製本 （1970年1月、3月、5月、10月、12月、1971年1月、3月、5月～12月、1972年1月～5月15日）

写真はすべて文化課所蔵